

Title	堀江帰一著 欧洲戦時の経済財政
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.1 (1915. 1) ,p.105- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150101-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

思ふに戰爭の利害得失は他の總ての社會的現象の利害得失の如く、其關係者に依りて異なるものなりとす。普佛戰爭は獨逸に大なる有形無形の利益を與へたるは疑ふの餘地なきも、佛國は之に依りて少くとも物質上に於ては一大損害を蒙れり。日露戰爭は我國を利し露を害せり。然りと雖も戰勝國は必ずしも常に大なる利益を收むるものなりと云ふ能はざるなり。南阿戰爭に於ける英國の如きは此例外の一なりとす。

假令戰勝國は國家として多少の利益を收むるものなりとするも戰勝國の個人は全部其利益を享受するに非ず。戰死者並に戰死者の遺族は恩給金等の償ふ能はざる損失を蒙り、農工商業者も、軍需品の供給と直接又は間接に關係を有するものを除きては、一方に於ては産業の衰退に依りて、又一方に於ては租税の増徴の爲めに多大なる損失を蒙ることなしとせず。戰敗國に在りても、全國民悉く損失を蒙る

ものなりと云ふを得ず。軍需品の供給者は往々戰敗國に於ても暴利を收むること少からず。又生存せる軍人は上官の死傷の爲めに意外に昇進の榮に浴することあり。

中立國に就きて見るも、今次の歐洲大戦亂の際に於ける傍觀國の如く、國際貿易の不振の結果大損失の蒙むることもあり、又日露戰爭當時に於ける英米獨等の自稱中立國の如く、交戰國に高價なる軍需品を供給する爲めに豫想外の奇利を博することあり。

然らば、人類全體に對する戰爭の效果は如何惟ふに此問題は限りある知識を有する吾人の容易に解決し能はざるものなる可きも、人生酸鼻の極たる戰爭が文明に及ぼす有形無形の影響は概して人類の進化を妨害するの結果を呈するものと看做すを至當とす可きが如し、尤も個々の戰爭に就きて論ずれば、或は十字軍遠征の如く文明の進運を刺戟せしものもある可けれども、

批評と紹介

堀江歸一著 『歐洲戰時の經濟財政』

四六版 一七八頁 定價六十錢
慶應義塾出版局發行

若し平和の手段に依りて從來戰爭の爲めに誘致せられたる文化の發達を促がすことを得るものなりとせば、吾人は勿論平和運動の成功を祈らざる可からず。然りと雖も、國際間の競争が現今の如く激烈なる間は萬國平和の實現を見るは蓋し不可能のことなる可し。

世界の歴史の上から見れば戰爭は殆んど絶ゆる時なく行はれて來たが、然し一國の見地から見れば平和が常態であつて戰爭は變態である、従つて戰爭が起れば平和の持續を前提條件として其の上に組み立てられたる平時の經濟状態に大變革を來すことは如何にしても免れない。然るに戰爭も時々起り得るのみならず、戰爭に對する一國の持續力は結局其の基礎を經濟の上に置いて居るのであるから、各國何れも平時から和戰兩時代に備ふるの目的を以て種々の財政經濟政策を行つて來た次第であるが、今次の歐洲戰爭は歐洲の列強が一度に立つて交戰國となつたことであるから其の各國の經濟上來した破綻缺陷は一層多大なるものがあるに違ない。仍て各交戰國の經濟上に果して如何なる變動を來したか、之に對して如何なる政策を採つたか、又今次の變動に鑑みて將來如何なる政策を採るに至るであらうか、而してそは我國に如何なる

影響を來すであらうかと、いふが如き凡そ是等の諸問題は今日何人も知らむと欲する所であるが、今や之に對する明瞭なる解答説明が提供せられた。堀江博士の著『歐洲戰時の經濟財政』は即ち是である。

本書は緒論の外「戦争と經濟」「歐洲戰時の食糧問題」「歐洲戦争と倫敦金融市場」「英國の戰時金融政策」「歐洲戰時の財政策」「戰時戦後の正貨問題」「結論」の六章より成つて居る。今簡單に其の内容を紹介すれば、第一章に於ては戦争の非經濟的なること及び諸國に於て戦争に備ふる爲めに關稅や中央銀行に關して採り來つた經濟政策否「非經濟政策」を述べ、第二章に於ては平時並に開戦の劈頭に採つた獨逸の食糧品政策を叙し「獨逸が農産物の供給に於て自給自足の状態に達せず將た又商業上の通路を保護するに足るの海軍力を備へずして自ら歐洲禍亂の首謀者となれるを愚なり」と評し轉じて英國に於ける食糧品の供給状態並に之に關する政策の過去及び將來を論じ、第三章及び第四章に於ては倫敦金融市場が戰地を去ること遠きにも拘らず開戦の當初突如大破綻を來したる理由を明にし、恐慌の經過並に之に對する英國銀行及び國庫當局の處置を記述批評して頗る詳細を極めて居る。第五章に於ては大陸諸國に於て開戦と同時に悉く兌換停止を行つた理由から戰時財政を不換紙幣に依頼するの可否を述べ獨逸に於け

る戰時公債を論評し、第六章に於ては諸國は今回の教訓に鑑みて將來益々兌換制度擁護の爲めに金の争奪を行ふこととなり其の結果國際金融上資本の輸出益々困難となるべきことを述べ、今や從來外債に依頼し來れる我國の正貨政策の根本的に一變せられざるべからざる時機至れること、並に之が爲めには非募債の勵行、租稅制度の整理、生産費軽減策等によつて輸出超過國となるの外はないと云ふことを述べて居る。

本書は前號に紹介せられた板倉敬授著「歐洲戰亂の真相と交戦列國」と同一のセリースに屬するもので、文體は例によつて頗る流暢、通讀僅かに二三時間にして足りる底の小冊子であるが、能く歐洲戰時に於ける經濟財政の現状と將來に於ける歸趨を示し我國朝野に向つて大に決心する所あるを要する所以を知らしめて居る。予は時局に際し特に經濟學上の案發の有無に拘らず一般の人士に對して一讀を薦めるものである。(増井生)

フォン、ビュロウ著『獨逸外交政策』

附 ユイルヘルム第二世治下の獨逸

正 價 六 拾 錢
博文館發行

政治の當局者がその行つた内外政策を發表することの困難

は今更云ふまでもない、獨の前宰相ビュロウ公の著獨逸政策の如きはたとへば現職にあらぬとはいへその遺したる政策の多くは現時の獨逸に於いて繼續せられつゝある以上その著の「一言一句は決してゆるかせにすることは得ぬのである。

日本の政治家は稍もすれば口を滑らして言實を捉られて困難する滑稽に比ぶれば公の著の如きは意味を外にふくませてその言はんと欲する目的を充分に達してゐる。思想開類に貧乏な我國の政治家の外交に關する言論は餘りに露骨で餘りに淺薄であるから此點は大にビュロウ公に學んでよいと思ふ。公は獨逸現帝を助けて行つたその帝國主義世界政策、海軍擴張の問題についてそのやむべからざる所以を巧みに叙述しありヘルンバルツなどの著の如く決してすぐに他國民の感情を害することは成るべく避けて圭角をあらはさぬ様にとめてゐる。

十九世紀後半より二十世紀に亘つての獨逸は物質主義より現實主義の色彩を著しく帯び來つたことは確かである。けれども空想的理想主義は決してその隆を没してゐない。ヘルンバルツなどはこの理想主義の暴露である。ビュロウ公の思想はこの理想主義と現實主義の調和であつてその云ふ所に何となく深みがあると思ふ。英國を評して『健全にして打算的なる國民的利己主義』なりと云ひ、そして他國民はこの英國人の性質に學ばざるべからざる云つてゐることなどは英人をほ

めるのか悪口するの一寸わからないとして佛國民の復仇戰を忘れずに獨逸をにくめることに關し、佛人を評して理想の國民と云うてゐる。

獨逸の世界政策についてはその統一より隣近の商工業の發展を評述し、ビスマアクの歐洲政策より一步すすめて世界政策に入る徑路を説いてゐるがその世界政策を過度に論じ、獨逸現今の禍根を殘したるものもあると思ふ。三國干渉問題につきて日本の怨みを買つたことについて『勇敢なる國民を敵とするは吾人の利益にあらざるなり』云ふてゐる所など青島陥落の今日からみれば何となく味ひあると思ふ。海軍擴張についての意見中『青年國民より一轉して意氣銷沈せる老年となるを欲せずんば吾人と海洋とは密接斷つべからざる關係を有することゝなりぬ』とあるはその名言と稱せらるゝ所で生きんとする獨逸人の意志力はこの表現されてあると思ふ。世界平和の攪亂者たる獨逸を敵とする吾人は一面にまた敵の真相を知ることには必要であり、そして本書の如きは著者は偉大なる政治家であるだけ大なる價值あると思ふ。

間崎氏の譯は一言一句と雖も原文に忠實であり、多小解しにくい點はないがこれは原著者の思想そのものが所謂我國人の云ふ流暢のものでないからである。譯者の大なる努力によつてあらはれたこの世界的名著は我國國民の皆讀まざるべからざるものであると思ふ。(松本生)